

ツィンバロン科の学生達はどこからやってきたのか
——ブダペスト王立音楽院の学生原簿（1897-1947）に関する一考察——

太田 峰夫

19世紀末、ブダペストやハンガリーの他の都市の音楽学校では、ツィンバロンを教えるための学科がつくられるようになった。ブダペストの王立音楽院の年報や学生原簿は、一体どのような人々がこのツィンバロンという「国民楽器」を学ぶのに近代的な音楽学校の枠組みを必要としたのか示唆を与えてくれる。それ以前、この楽器はロマの楽師によってのみ演奏され、教えられていたのではあるが。

1897年度から1947年度までのブダペスト王立音楽院ツィンバロン科の学生原簿は何よりもまず、最初の20年間において、ロマの楽師の家族出身の学生が少なかったとしても、さまざまな階層、宗教、民族的出自の学生達が同じ一つの学科で学んでいたということを示している。そして第二に、第一次大戦以前に顕著だった学生の社会的出自の多様性が、戦間期になると失われることも教えてくれる。小ブルジョア階級や労働者階級出身の学生数、および「音楽家」の家族出身の学生が急激に増える一方で、商業に従事する人々や高位の公務員は、自分の娘や息子に王立音楽院でツィンバロンを学ばせなくなってしまうのだ。この現象は「藝術上の目的に向けて準備」し、かつハンガリー音楽に通じているような学生を育てようとする音楽院の当初からのもくろみが、いかに戦間期の中間層社会の現実と相容れないものとなっていたかを示唆している。